

▲青螺山からの北望／伊万里湾から伊万里市街地。青螺東峰の先に、遠く浮岳・作礼山が見える



▲大川内山から見る青螺山の雄姿



▲黒髪山から見る蝸牛貝のような形の青螺山

青螺山：研ぎ澄まされた黒髪連山の最高峰

山名 RQNo. 4 青螺山
RQNo. 5 青螺御前

ルート No.3-1 大川内山から周遊

登山口 RQNo.40 大川内山キャンプ場入口

最寄駅 西肥バス／大川内山
登山口まで1kmの車道歩きが必要

駐車場 大川内山キャンプ場入口
林道ふくらみに5台、近くに10台可能

(注1) RQの意味

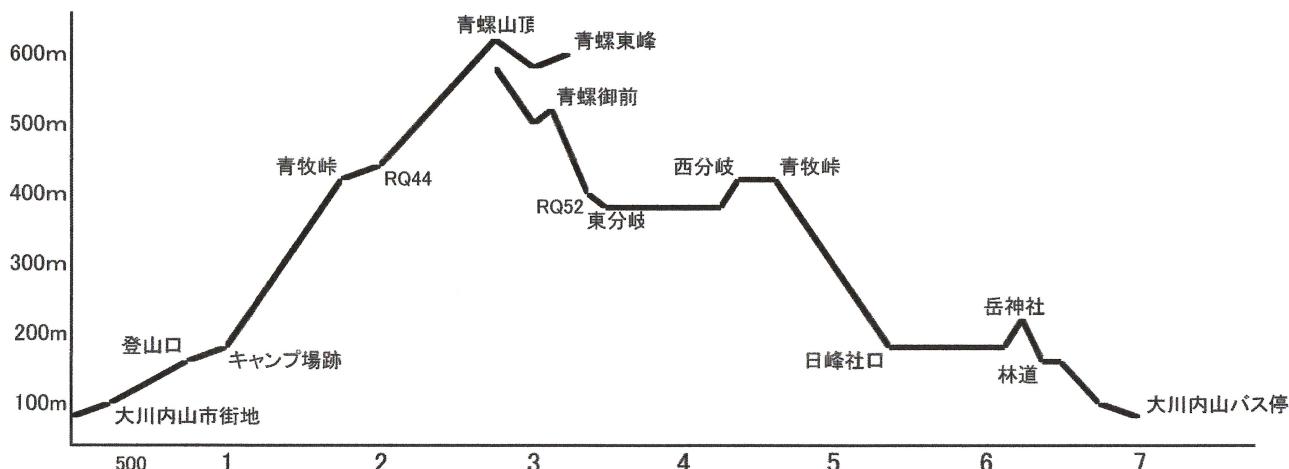
レスキュウポイントの意味です。

本来なら、RESCUEですから、短縮造語は「RC」とすべきですが、
ここでは「RQ」として表記しています。

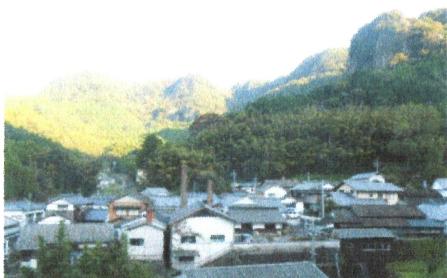
コースタイム

大川内山 バス停	15分	大川内山 登山口	5分	キャンプ場 跡	40分	青牧峠 RQ43番	5分	青螺西登山 口／RQ44番
青螺西登山 口／RQ44番	20分	左へ巻く岩 場／RQ45	15分	痩せ尾根取 り付き／	20分	青牧峠下降 点／RQ47	5分	青螺山頂 RQ4番
青螺山頂 RQ4番	20分	青螺東峰 RQ49番	20分	青螺山頂 RQ4番	25分	青螺御前 RQ5番	25分	青螺東登山 口／52番
青螺東登山 口／52番	5分	トラバース道 東分岐／53番	20分	トラバース道 西分岐／56番	5分	青螺西登山 口／RQ44番	5分	青牧峠 RQ43番
青牧峠 RQ43番	35分	日峰社入口	5分	日峰社	40分	岳神社	30分	大川内山 バス停

高低図



アプローチ



▲大川内山の街並み



公共交通機関利用の場合

伊万里駅前から終点の大川内山バス停へ市営バスで向かう。
バス終点から窯元街へ進み、畠萬陶苑の先の三叉路を西(右)折して
窯元の立ち並ぶ坂道を、登山口となるキャンプ場を目指して坂道を登り詰める。
民家が途切れ、植林地の中を進むと林道に出る。ここがRQ40番代の登山口である。
畠萬陶苑前の三叉路を直進すれば鍋島藩窯跡で、下山路はこの道を戻ってくる。

マイカー利用の場合

大川内山の窯元街を抜け、登山口のキャンプ場入口を目指す。
畠萬陶苑の先の三叉路を西(右)折すると、窯元街が続き、道幅は狭く急坂で、
観光客にも注意して登る。窯元街を過ぎ、植林地を抜けると林道に出る。
林道脇には車5台分の駐車場と、林道下の広場には10台が駐車できる。
林道は西(右)が腰岳、越ノ峠への道で、東(左)が岳神社入り口を経て、
武雄市境に近い岩谷集落に至る。

◀腰岳林道にある登山口駐車場

登山ルート



▲大川内山キャンプ場へ登山開始



▲小滝／滝右岸にザイルあり



▲西尾根の岩場登りが始まる

大川内山登山口(RQ40)から青牧峰へ

登山口(RQ40)の階段を登り、石張り道を進むとすぐ、
左手に日峰さん(鍋島直茂祠)への観音参拝道を分ける。岳神社へ興味深い道だ。
今回は、下山後に、余力を見て踏破する。まずは青螺山へ直進する。
キャンプ場を通り、沢を渡って左岸を登る。踏み跡とケルンを頼る。
すぐに渡渉して中州状となり、再び渡渉して斜面にとりつく。
所々で崩壊もあるが、左岸の斜面の踏み跡を登れば問題はない。
RQ42番の所で滝に出て、滝の下を右岸へ渡り、ザイルに従い滝上に出る。
その先で、ケルンに従い再び左岸へ渡る。
谷の上部に出ると広く開け、そのまま直登したくなるが、谷筋を忠実に攻め、
ケルンをたどって青牧峰(RQ43)に着く。

青牧峰から青螺山へ

すぐに道標があり、西(右)へ下るの牧山と龍門への道を見送り、青牧峰の
なだらかな登山道を上下して、青螺山西登山口(RQ44)に着く。
分岐を南(まっすぐ)へ進む道は、青螺山トラバース道で、帰路に使用する。
道標に従い東(左)の登山道を登る。
分岐からの登山路は、青牧峰のなだらか道だが、疲れた足には急登に感じる。
1つのピークを越え、下るとすぐに、再び登り道となり、
これからさらに急登となる。途中で、左手への巻き道もあり、2つの道の合流部で
青螺西尾根の岩壁の下(RQ45)に出る。この壁は左に巻く。
巻き道の8mの岩場にはザイルが張られ、木の根にすがりながら登りきると、
さらにザイル伝いに高度を上げ、岩場の西尾根に出る。
右手は先ほどの岩壁となるので、岩の合間を左へ進み、
5mの岩尾根をザイルと岩角伝いに登りきって尾根に立つ。RQ46番である
ここからは瘦尾根登りで、南(右)手の「大ウロコ岩」は圧巻。眼下の龍門ダムも



▲青螺西尾根から龍門ダムを見下ろす



▲青螺山頂直前の急登／ザイルあり



▲青螺山頂からの急な下り／ザイルあり



▲青螺御前への最後の登り／ザイルあり



▲ここが要注意／RQ58番で登山道は主尾根から右折する

見事だが、転落には十二分に注意したい。これより上部は、ツクシシャクナゲの自生地となる。初夏5月上旬が開花期で、表年は3年周期らしい。

太目のザイルが見えてくると、いよいよ最後の直登となる。

直線の尾根道で、はるか先に頂上尾根と空が見えている。

登りきるとRQ47番で、山頂へは南(左)へ行く。即ち、山頂部は屋根状で、その頂上部を北から南へ渡ることになる。

2分も歩けば、視界が開け、青螺山頂に着く。180度の展望が待っている。

青螺東峰／河内岳(RQ49)へ

余力のある人は、2等三角点のある、青螺東峰を往復しておきたい。

東に延びる尾根道(踏み分け)は、岩尾根で滑りやすく、樹木にすがりながら下る。

途中の右手にろうそく岩を見て、小さい暗部(RQ48)を過ぎれば、東峰(RQ49)に着く。標高は599mの2等三角点だが、今は周囲の樹木が繁茂して、三角点機能は無い。北(左)の尾根道は急坂となり、下りきると山ノ城方面と、筒江・少年自然の家方面へと尾根を分ける。

樹木の尾根だが、所々に岩壁があり、転落の危険性が多いので、安易に踏み入ってほしくない尾根である。

どうしても、この尾根を下る必要がある場合は、地図と磁石は必携である。

(おねがい) 青螺東峰から山ノ城への登山路

このルートは、連山最高峰の青螺山の奥深さを知ることのできるルートです。道迷いや転落などの事故も多く、現在、青螺山頂の所で閉鎖しています。

登山者の開放希望も多いのですが、正規ルートとしての手続きや

道標・ザイル整備など準備作業を進めていますので、完了するまで、通行はご遠慮ください。

青螺南尾根を下る

下山路は、青螺山頂部から南の木立の間を下って行く。

下り始めの傾斜は急で、ザイルや樹木にすがって下る。次第に緩やかになる。やがて岩場に出て、ザイルを頼りに右側を下る。

南尾根の小段が、青螺御前までの中間点で、さらに尾根を下って行く。

鞍部(RQ59)に下り着ついですぐ、正面の尾根を登り返す。

尾根の西(右手)に進み、樹林の中の岩場を登り、最後はザイル頼りに登りきると、青螺御前(RQ4番)に着く。岩が積み重なった狭いピークだ。

振り返れば、青螺が大きな壁となって横たわっている。

青螺御前南尾根を下る

一休みしたら、南尾根を進み、すぐに急坂となる。

傾斜角度はここまで下ってきた青螺南尾根以上に急である。

尾根筋の西(右)脇の踏み跡を、樹木頼りに下ってもよい。

小段に出て、再び急尾根を下る。ほどなくして、足元に石柱があり、そこから尾根を西(右)にトラバースする。道標があり、RQ58番がある。

トラバースは短く、RQ57番から南(左)へザイル頼りに直下降する。

やがて傾斜は緩み、支尾根に出て鞍部に着く。

正面の尾根を登り返してすぐ、西(右)への分岐があり、小さな尾根を乗り越す。

尾根の斜面の踏み跡を頼って西へ下りていく。

ほどなくしてRQ52番の青螺東登山口の分岐を、北(右)へ進む。

分岐をまっすぐ下れば、日向坂の景勝地を経て見返峠への下り道となる。



▲青螺トラバース道／ガレ沢

青螺トラバース道から青牧峠へ

しばらくは小さな谷を横断し、檜の植林地に入る。

植林道を踏み跡頼りに下れば、小尾根に出て、そこを北(右)へ下る。

ここが東の分岐(RQ53)で、すぐ道標がある。

ここからは、青螺西面をほぼ同じ標高でトラバースする。

谷部を横断すれば、太鼓腹のような青螺西面をまわりこむように進む。

太鼓腹の脇にあたる所にRQ54番があり、ほどなくして、岩の転がるガレ沢に出る。

このガレ場は長く続き、積まれたケルンを確認して、ほぼ同じ等高線上を進む。

RQ55番を過ぎれば、谷を横断して、登り道に変わる。

最後は急坂で、登り切って支尾根に出る。

ここがRQ56番の西の分岐で、支尾根を北(右)へ進む。

すぐに斜面のトラバース道に変わり、青螺西登山口の分岐(RQ44)に出る。

青螺登山道を右に見送り、小さなアップダウンを繰り返し、青牧峠(RQ43)に着く。

牧山登山路と、龍門への下り路を左に見送り、

この峠を北(右)へ乗り越すように、舗装道路のような道を進む。

青牧峠から大川内山キャンプ場へ

舗装道路のような登山道はすぐに、広い水無沢に変わる。

大局的にはこの沢の左岸を下るが、わずかな流れに積まれたケルン頼りに下る。

やがて谷も狭くなり、牧Ⅱ峰北尾根の斜面を下るようになる。

下山路はやがて沢の左岸となり、ケルンに従い右岸へわたると、小滝の上に出る。

滝右岸のザイルを頼りに下りて、滝下を左岸へ渡り返す。

RQ42番の小さな広場に出る。

更に、沢の左岸というより斜面の樹木間の踏み跡を、ケルンたよりに下り続け、

ケルンを合図に右岸へ渡渉し、支尾根状を下る。

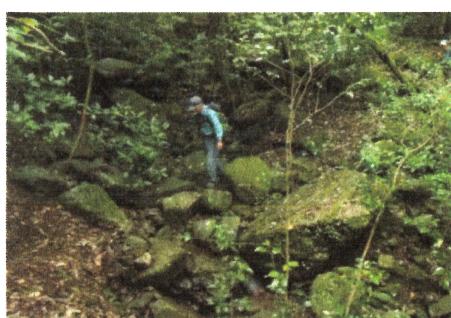
左手から流れ込みがあり中州状になり、再び渡渉して左岸側のガレた斜面を下ると大川内山キャンプ場に出る。

昭和27年に開設され、多くの自然愛好家に親しまれたキャンプ場だったが平成25年に廃止された。

沢を右岸にわたり、キャンプ場施設を通り抜けて、石張りの歩道に出て、登山口のある林道方面へ下る。



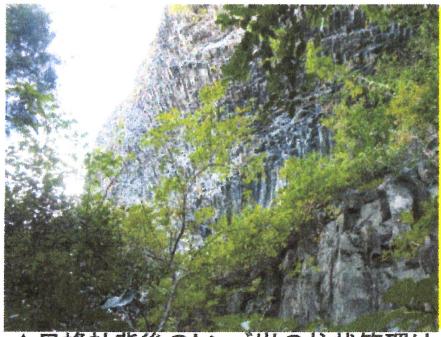
▲青牧峠から大川内山へ下る



▲沢の渡渉を繰り返すこと4回



▲大川内山キャンプ場跡／懐かしさと寂しさが交錯する



▲日峰社背後のトンゴ岩の柱状節理は
圧巻



▲岳神社手前の青螺滝

日峰社から岳神社、藩窯跡を経てバス停へ

林道直前で、木立の中に立つ道標たよりに、日峰社方面へ右折する。

日峰社までは参拝者も多く、整備された参道を登る。

頭上には玄武岩質の柱状節理が、唚然となるぐらいに見事。

しかし落下の可能性もあるので注意が必要で、ヘルメットも準備しておきたい。

トンゴ岩の下にある日峰社とは、佐賀藩祖の鍋島直茂の祀碑。

17世紀終盤に、有田から鍋島藩窯が移転し、この地は「秘窯の里」として繁栄した。

その鍋島家始祖の直茂公を崇めて建立された。

ここから、直立する岩場の根元をめぐる登山道が岳神社まで続く。

屏風岩、シヲ岩の岩壁際に眠る観音石仏の登山道をたどり、

大きな谷を横断するように回りこみ、青螺滝の水場から岳神社への登りとなる。

柱状節理の岩窟の中に神社はある。時々落石があるので、

ゆっくり石仏群を鑑賞していると危険。神社へ避難し参拝し、階段道を下る。

長い階段道を下れば林道に出て、大川内山へは、正面の参道を下る。

林道を東(右)へ少し歩き、北(左)へ細い急坂の車道を下っても、集落に下り着く。

左手に岳神社下宮脇には、陶工副島勇七碑がある。

大川内山市街地は今日も、観光客でにぎわっている。

車を留め置いた登山口へ戻るためには、嶽神社から下り立った林道を西(左)へ、

途中のトンネルを通過して行く。700mの距離だ。

みどころ



陶工/副島勇七

17世紀後期に、鍋島藩御用窯に名を残した陶工です。

腕の立つ陶工でしたが、藩窯内で事件を起こし、藩外へ逃亡します。

製陶技術の漏えいを恐れた鍋島藩は密偵を送り、捜索します。

数年が経ち、四国道後の砥部で生産された焼きものが市場に出回り、

その作風が鍋島藩窯の製品に似ていたことから足がつき、

勇七は佐賀藩の密偵に捕えられて処刑され、武雄領境の鼓峠でさらし首にされてしまいます。

副島勇七の話は、現代に数々の小説で描かれますが、

その供養塔は、藩窯跡に近い岳神社下宮の石仏群の中に祀られています。

街中に下りてきて、

大川内山バス停終点の東向いの墓地には、無縁陶工の墓碑があります。

無数の墓石がピラミッド状に積まれ、

その頂には石仏が、青螺山に向かって立っています。

この地は、鍋島藩の御道具山が有田から移されるまで、

およそ1世紀近くは、陶器の窯が5か所ほど稼働していました。

朝鮮渡来の陶工や、彼らと共に陶器を焼いた陶工たちが、土や薪を探して山野を駆け回っていたことでしょう。



▲(写真上)副島勇七碑、(写真下)無名陶工の墓碑

植物や野鳥の宝庫

「黒髪山系の植物」「日本の野鳥」の各著者の承諾を得て掲載しています。



ツクシシャクナゲ ツツジ科

黒髪山系の植物：167ページ

植生

樹高 3~8mの常緑小高木

葉 長楕円形の革質で厚く、葉裏に褐色の軟毛が密生し、スponジ状となる

花 淡紅色で大きく美しく、数年おきに咲く。開花期：4月

和名の由来

希少性 かつて黒髪連山には数多く自生していたが、盗掘により撃滅し、急峻な岩場に残るのみである。



ガンピ ジンチョウゲ科

黒髪山系の植物：106ページ

植生 林縁に生える

樹高 0.5~3mの落葉低木

葉 互生で卵形。全緑で、ビロード状の白毛に被われ、葉柄は短い。

花 淡黄色で筒状

樹皮 サクラに似ている。

樹皮は縦長の繊維が切れにくいため、和紙の原料とされた



和名の由来

希少性 九州では黒髪山系のみ



ダイモンジソウ ユキノシタ科

黒髪山系の植物：37ページ

植生 湿った岩場に生える

高さ 10~30cmの多年草

葉 根生し長い柄があり、腎円形で5~12浅裂し、基部は円形。葉表には粗毛がある。

花 花茎の先に多数の白花が付く。花弁は5個で下部の2個が長い

開花期：10月

和名の由来

5個の花弁の形が「大」の字に似ることから

ホオジロ フィールドガイド「日本の野鳥」：268ページ

大きさ L: 16cm

習性 屋久島以北の低地から山地の低木林、林縁、松林などに多い留鳥。繁殖期に雄は、木の梢や電線など目立つ場所で、胸をそらせた施政でさえする。

特徴 雄は頭と体の上面が赤褐色で黒い縦斑があり、腰は赤褐色。雌は色が鈍く、顔の斑は褐色。

啼き声 地鳴き：チチッ、チチチッと鳴く。

さえずり：チヨッピーーチリーチョ、チーツクとかチヨツチヨツスチョホイツケなどと早口で。

ノスリ フィールドガイド「日本の野鳥」：174ページ

大きさ 雄L: 52cm、雌L: 57cm、W: 122~137cm

習性 北海道から四国の低山で繁殖し、冬季は全国的に見ることができる。翼と尾を広げて輪を描いてとぶことが多く、頻繁に停空飛翔をする。

啼き声 口笛のようにピーエーと鳴く。